2024年度　平和学習会

武器としての飢餓

ナチスとイスラエルをつなぐもの

写真提供：※1パレスチナ農業開発センター（UAWC）
※2㈱オルター・トレード・ジャパン（ATJ）のホームページ「ジェノサイドの手段としての飢餓―ガザ地区の飢餓についてUAWCからの声明（2025年4月18日付）」の記事より
※1「パレスチナのエキストラ・バージンオリーブオイル」の出荷団体の一つ。パレスチナで農民支援や平和に向けた活動を行っている。
※2 グリーンコープなどの生協や市民団体がつくった民衆交易を行う会社。

講師
藤原 辰史さん
京都大学人文科学研究所教授。専門は農業史、食の思想史。博士（人間・環境学）

グリーンコープは「不戦」を原点に掲げ、生命（いのち）と平和を何よりも大切に考えています。共同体組織委員会では「平和」について考える機会として、継続して平和学習会を開催しています。

２０２４年12月18日、京都大学教授の藤原辰史さんを講師に招き、「２０２４年度 平和学習会」がオンライン形式で開催され、組合員など１８９人が参加しました。講師の話をとおして飢餓を武器に戦争が繰り返されてきた歴史や世界の現状を学ぶことで、改めて参加者一人ひとりが平和について考えを深める機会となりました。

当日の講演要旨と参加者の感想を紹介します。

今、パレスチナのガザ地区では、食糧とエネルギーを断ち切られて子どもたちが飢えている。イスラエルは飢餓を武器として使い、ガザ地区の人たちをジェノサイド（虐殺）している。

戦争は人間を人間でなくしてしまう。それが戦争の恐ろしさである。

ドイツ・ナチスの「飢餓計画」

現代史を動かした事件の背景には、飢餓が武器として使われた事例がこれまでも多くある。

１９２９年10月、アメリカで大恐慌が起こると、アメリカから穀物を輸入していたドイツや、アメリカに絹を輸出していた日本は大きな打撃を受け、食糧の確保や自国経済を維持するための策として、植民地の拡大を目指すようになった。

そのような中、ドイツでナチス政権が誕生する。党首のヒトラーがソ連への侵攻を決断すると、食糧・農業省事務次官だったヘルベルト・バッケは、飢餓を意図的に武器として使うことを提案した。

１９４１年5月、ロシア人３０００万人を餓死させることで、余剰となる作物をドイツ人のものとする「飢餓計画」が立案される。ナチスは食糧配給制度を悪用し、ドイツ人にはたくさんの食糧を配給し、ロシア人には少ししか配給しないという人種差別的な政策を進めた。さらにナチスは、ポーランドにドイツ人を移住させて農業大国をつくることを計画。ドイツ人を入植させるために、ポーランド人を次々と追い出していった。

ナチスがこのような計画をすすめた背景には、第一次世界大戦時にイギリスによって食糧の輸入経路を絶たれ、子どもを中心に多くのドイツ人が飢餓に陥った経験がある。第二次世界大戦が始まると、「二度と飢える国をつくらない」をスローガンにあげたナチスは、多くの支持を獲得していった。

ナチスが行ったこととして私たちが真っ先に思い浮かべるのは、ユダヤ人の虐殺だろう。しかしナチスが飢餓によって３０００万人ものロシア人を殺す計画をしていたことは、これまであまり論じられてきていない。私たちが知っているのは意図的に選ばれた一部の歴史だけであり、それによって偏った歴史観を持たされていないだろうか。６００万人のヨーロッパ・ユダヤ人虐殺の背景に隠された、もうひとつの恐るべき犯罪があったことを知っておきたい。

繰り返される飢餓による暴力

「自分たちが食べるために他の国や地域を飢えさせる」という事例は日本でも起きていた。

１９１８年、米不足が続いていた日本で米騒動が起こると、当時首相だった原敬は日本人を飢えさせないための策として、朝鮮や台湾で現地の農民たちに日本米を作らせ、大阪や東京に移出させた。１９３０年の調査によれば、植民地となった朝鮮では、農民の48％が「窮民」となり、１２０万戸以上の農家が草の根や木の皮を食べて食糧不足を耐えていたとある。

また、１９４８年5月、パレスチナにユダヤ人を中心とした国イスラエルが建国されると、イスラエルはそれまでパレスチナに住んでいたアラブ人を殺害したり追い出したりして入植地を広げていった。そしてドイツは、ナチスの反省という名目でイスラエルに技術援助などを行い、ユダヤ人がパレスチナの人々にふるう暴力を黙認した。

イスラエルは今もパレスチナの人々を追い出し続けている。ナチスや日本が行ったのと同じ暴力が繰り返されているのだ。

飢餓の連鎖を止めるのは私たち自身

飢餓は長い間「災害」だと考えられてきたが、人間が意図的に起こすものである。ブラジルの学者ジョズエ・ジ・カストロは、ナチスが起こした意図的な飢餓がヨーロッパの植民地主義や戦後の多くの飢餓とつながっていることを指摘している。

私たちの身近にあるバナナやチョコレート、砂糖などの多くは、かつて植民地だった地域で生産されており、その背景には、今も現地での搾取や児童労働がある。雇い主は労働者に十分な賃金を与えず、「飢え」させて支配することで労働力を確保している。植民地での暴力と現代の私たちの食とがつながっていることを忘れてはならない。

私たちの周りでは食べものが安易に捨てられている。それができるのは、どこかで誰かが飢えているからに他ならない。現在、地球上で約７億３３００万人が飢餓に苦しんでいる。私たちの飽食を支えるために４秒に１人が餓死しているのだ。しかし、社会システムとなってしまった飢餓に、私たちは気づくこともなく、良心の呵責にとらわれることもない。

グリーンコープの組合員がグローバル企業の売る製品ではなく、顔のみえる生産者の作物を選ぶ前提には、「人を傷つけない食べものを選びたい」という思いがあるのではないか。私たちは今こそ、自らの加害性を意識することで、「武器としての飢餓」の歴史に終止符を打たなければならない。

学習会参加者の感想から（一部抜粋）

- 今まで歴史の側面しか見てきていなかったと感じた。
- 「思考を人任せにしていないか」との言葉に、自分で考えていかなければいけないと思った。
- 平和と食の安全は、実はつながっているということが分かった。
- 今世界で起こっている飢餓をなくすために、わが子がそうならない未来をつくるために、自分に何ができるか考えた。
- 人を傷つけない食べものを選ぶという話を聞き、グリーンコープの民衆交易品などをしっかり利用して支えていきたいと思った。
- 現状を知り、みんなが幸せになれる食べものを選ぶことは私たちができる身近な平和活動だと思う。

送信

一般社団法人グリーンコープ・ワーカーズ・コレクティブ連合会
専務理事
加納 厚子

グリーンコープに加入して間もなく代理人※ネットワーク運動（当時）に参加しました。「生活って政治」「みどりの地球をみどりのままで子どもたちに残す！」という言葉は新鮮で衝撃的でした。これまでは選挙というと誰に入れても同じ変わらないと思い、候補者の政策など考えず頼まれた人に投票していたからです。活動を通して生活に身近な様々な事が議会で決められていることを知ることができました。日々の生活の中で疑問に思う事や提案したい事を議会へ届ける代弁者が身近に居ることは心強く、選んだ責任も同様に感じています。那珂川に初めて代理人が誕生した1989年から5代目が活躍しています。運動が継続出来ていることはとても嬉しく誇らしくも思っています。

※ネットワークをつくり、自分たちの代弁者＝代理人を議会に送って市民自治を目指す運動。グリーンコープでは、一時期ふくおかの前身生協（組合員）が取り組んでいた。